

# 日建連建築セミナーを開催 「現在問いなおさなければならぬこと」

日建連建築設計委員会（賀持剛一委員長）は昨年十月十九日、東京・中央区の東京証券会館ホールで「日建連建築セミナー」を開催した。講師には世界的建築家でBCS賞も多数受賞している横文彦氏をお招きし、「現在問いなおさなければならぬこと」をテーマにご講演いただいた。新型コロナウイルス感染防止のため、事前収録したレクチャー動画を放映し、対談はオンラインで会場と事務所をつないで行われた。

## 建築家としての「DECENCY」

横氏は冒頭、自身の座右の銘として「DECENCY」をあげた。これは「振る舞いや作品が建築家として恥ずかしくない」という意味である

ると述べ、続く主要作品の紹介においても、同様の視点を基軸にヒューマニズムな空間へと展開していく過程を解説した。

立正大学熊谷新校舎（一九六八年竣工）は「低層の建築群によって囲まれた広場を重要視した計画だ」と説明した。概念の先行する造形的な観点から設計するのではなく、キャンパスを学生の生活の場としてとらえ、自由度の高い空間とするため、広場など特定の目的を持たない空間が計画の中心に据えられた。慶應義塾大学湘南藤沢キャンパス（一九九〇～九四年）では、「建築群の間を歩いてめぐるヒューマニズムな計画とした」と横氏。大きなボリュームをつくり、建物内で学生を活動させる、という当時のキャンパス計画の潮流に対するアンチテーゼ



横文彦氏（左）と賀持建築設計委員長とのオンライン対談の様子

としての提案だという。

作品解説を通して強調されたのは、人々の自由な活動の舞台となる空間を追求する姿勢だ。横浜市立並木小学校（一九八一年竣工）の校舎内で活発に遊ぶ子供たちの写真为例にあげ「こうした風景を建築を通してつくっている」とも語った。代官山ヒルサイドテラス（一九六九～九二年）では、それぞれ異なる敷地形状を生かしながら、歩道とつながりを持った奥行きのある建築群をつくったと語り、一貫して

「ヒューマニズムな空間」を目指した設計姿勢を強調した。

## これからのヒューマニズム

著書『残像のモダニズム』共感のヒューマニズム」をめざして』（二〇一七年、岩波書店）でも言及されているように、横氏は近年、「ヒューマニズム」への思考を深めているという。セミナー後半の対談では、賀持建築設計委員長から「新しいヒューマニズムとは何か」が問われた。横

氏は「ヒューマニズムは古くからあるコンセプトだから、そこに建築の原点がある。それにもかかわらずそれに当たる日本語はない」と指摘。「国内では十分な議論が熟成されておらず、これからみなさんと一緒に考えていきたい」と呼びかけた。

評であった。特に三〇代以下の参加者が三八%を占め、開催趣旨である建築を学ぶ学生、設計業務に携わる若手育成支援の目標と合致している。また、講師および講演内容が良かったという割合が七五%を超えており、重鎮の横氏をお招きして、現在のお考えを伺えたことは有意義であったといえる。

講演の様子は昨年十二月から日建連YouTubeチャンネルで公開している。当日セミナーに参加された方からのアンケート結果は次の通り好



日建連YouTubeチャンネルはこちら

